

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 ⑰

## \*Auguri! ~イタリア、結婚式の日~\*

深草 真由子

五月三日。アマルフィ海岸を見下ろす山の中腹にある、ラヴェッロという名の小さな街にやってきた。サレルノからここまでの海岸道路が大変だった。急カーブで対向車とすれ違ったり、自転車を追い越したりするたびにヒヤヒヤさせられることの連続で、山側の切り立った崖に襲われはしまいかと心配こそすれ、海の美しい眺めを堪能するような気持ちの余裕は一切なかった。イタリアは交通マナーの悪い国だとよく言われるが、地形的に運転の難しいこのアマルフィ海岸道路でも、横断歩道でない場所を堂々とわたる歩行者や、むやみにスポーティーな走りを追求している(ように私には見える)バイクもいるし、車を脇に止めて(そうして他の車に迷惑をかけながら)草花を採集している旅行客もいる。イタリアらしい光景だと言われればそうなのかもしれないけれど…。ともあれ、無事に目的地に到着した。

ラヴェッロに来たのは、友人のドメーニコ(通称ミンモ)とロザリーア(通称リーア)の結婚式に参列するためだ。「ドメーニコ」も「ロザリーア」も南イタリアに多い名前で、ミンモはカセルタ、リーアはナポリの出身。ふたりとも四十歳をこえているから、イタリア人はほとんど誰も結婚適齢期なんてものを気にしていないけれど(相手がいるかいないかは気にしているみたいだが)、日本で言われるところの晩婚にあたる。もうたいそう長い間、ふたりはナポリ市内で生活をともにしてきた。これまでも家族や親戚、同僚、友人たちから夫婦同然と見なされてきたし、結婚しようがしまいが普段の生活はそう大きくは変わらないのではないかと

(他人の私には)思われるのに、いったい何がこのふたりを結婚の決心に至らしめたのだろう。一生連れ添っていくことのできる相手だという確信が固まったからなのか、尋ねはしないが個人的に気になるころではある。イタリアにはフランスのパックス婚のようなパートナー契約制度はなく、結婚するかしないかのどちらかを選ぶことになる。だが結婚せずとも家庭を築き、子どもを作り育てていくカップルも多いし、とくに保守的な環境で生きているわけでもないかぎり、それが世間的に問題視されることはほとんどないだろう。

ミンモとリーアはラヴェッロのドゥオーモで婚姻の秘跡を受け、正式に夫婦となる。ミンモたちは敬虔なクリスチャンではないので、教会で結婚すると聞いたときは少し驚いた。イタリアにおける結婚には三種類ある。一つ目は役所などで挙式する民事婚、二つ目は宗教婚、三つ目はカトリック式の宗教婚が戸籍にも反映される宗教+民事婚。どの場合においても、今のところ認められているのは異性間の結婚だけだ。教会で結婚するとなると、カトリックの場合は洗礼、聖体拝領、堅信の秘跡を受けていることが必要になる。イタリア人の多くは子どもの時にこれらの秘跡を受けているので、実際に信仰心があろうがなかろうが、慣習にならってカトリック式に結婚し、そして民事法上も夫婦になるという、三つ目の形を選択する人が多い。カトリック信徒ではないために宗教婚ができない場合、もしくは秘跡は受けているものの信仰心がなかったり、なにか思うところがあったり宗教婚をする意志がない場合には民事婚が選

ばれる。二つ目に挙げた純粋な宗教婚というのは、教会法上は夫婦だが戸籍の上では赤の他人という、少しめずらしい結婚の形である。著名なジャーナリストの夫を亡くしたある女性タレントが、新しい恋人とこの形の結婚をしたというゴシップを聞いたことがあるが、彼女らが私の知る唯一の純粋な宗教婚カップルである。「収入の高かった前の夫の遺族年金を失わないために、未亡人のままでいる方がいいのよ」。こんなふうにしてその新婚女性はインタビューに答えていた。



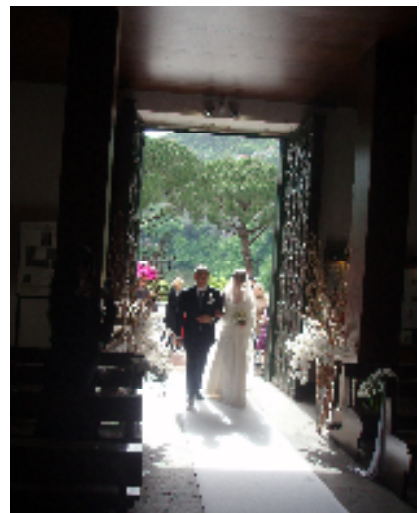
【ラヴェッロのドゥオーモ】

式の開始予定時刻の午後四時には、多くの参列者がドゥオーモに集っていた。イタリアの結婚式での服装はわりと自由で、今回もオペラ歌手のような派手色ドレスをまとった女性もいれば、ジパンにジャケットという装いの男性もいる。十一世紀に建造されたドゥオーモの内部には、二つの美しいモザイクで飾られた説教壇があり、それらを見学している観光客の姿もある。半時間ほど遅れて花嫁が入堂(花嫁は遅れてくるのが当然とされている)。八十もの細工装飾のある十二世紀のブロンズ製の正面扉をくぐり、父親と一緒に身廊をゆっくりと歩くウエディングドレス姿のリア。参列者みな起立し、拍手喝采とフラッシュの嵐。祭壇の前で、花嫁の顔を覆うヴェールを花婿がたくし上げたら、ここから神聖なミサが始まる。

花婿は花嫁のドレスを結婚式前に見てはいけないことになっているからおさらのこと、花嫁が教会に入ってくるのを見るのは彼にとって感極まる瞬間にちがいない。イタリアにはどんな小さな街でも必ずといっていいほど花嫁衣装の店がある。素材の質感やスカートのライン、刺繍の飾り

などが互いに異なるさまざまなタイプのドレスが陳列されているショーウィンドウを見ていると、肩を露にするローブ・デコルテが多いことに気づく。こういうスタイルをイタリア人女性は好むのだろう、たしかに素敵だ。だが日本人の感覚からしたら目のやり場がないというくらいに大胆に胸元が開いているものが多い。教会の中では肌を露出してはいけないはずなのに…。

ミンモとリアは結婚の合意を交わし、互いに秘跡を授けあって、無事夫婦となった。ミサの途中で朗読されたのは『シラ書』の一節(「徳高き女の夫は幸福である。…太陽は神の山々を照らし、徳高き女の美しさは家を飾る」)、パウロの『コリント人への第一の手紙』の一節(「兄弟たちよ、より大きな賜物を熱心に求めよ!…愛は忍耐強く、愛は善良である。…すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して終わることがない」)、そして『マタイによる福音書』の一節(「あなた方は地の塩である。…あなた方は世の光である」)、最後にハリー・ジブラーンの詩集『預言者』より「結婚について」(「あなた方はともに生まれた、そして永遠にともにあるだろう。…ともにありなさい、だが近寄りすぎはならない。神殿の柱も間を隔てて立ち、オークの樹とイトスギも、互いの陰にあっては、大きくなることはないのだから」)。結婚式にふさわしい数々のテキストの中からこれら四編を選ぶために、新郎新婦は相当話し合ったらしく、それだけふたりの想いのこもった朗読となった。



【父親に導かれ、バージンロードを歩く花嫁】

さて、挙式のあとはレストランでの晩餐会がつづく。まずは食前酒、そして前菜、プリモとセコンドをそれぞれ二品づついただき、ウエディングケーキの入刀の後にドルチェのビュッフェがあり、その数時間をテーブルを囲んでおしゃべりをしながら過ごす。そのとき初めて知り合い、そして今後会う機会もめったにないような人たちとであっても、お祝いの席ということもあって、あたかももともと友だち同士であったかのような楽しい会話がはずむのである。私のテーブルではカプリ島にあるティベリウス帝の別荘のことで、近々行われる欧州議会の選挙やギリシャの若き政治家アレクシス・ツィプラスのことで、二日前のメーデーのコンサートでピエロ・ペルというロック歌手がステージの上から訴えたメッセージのことが話題になった。私の真向かいに座っている婦人が、なにかの医療訴訟について話し始めたが、残念ながらそれはよく聞き取れなかった。というのも、ちょうどその日はサッカーのイタリア杯の決勝戦ナポリ対フィオレンティーナがあり、隣のテーブルに座る誰かのタブレットの小さな画面の前にナポレターニ(新郎ミンモを含む)が群がり集まって、大騒ぎを始めたからだ。ナポリ、無事に勝ったみたいでよかった…。

気持ちのよい疲労感で、結婚式の長い一日を終えた。ミンモとリーアが幸せな家庭を築きますように。そう心から願い、ラヴェッロを去った。



【新郎新婦からのプレゼント。

砂糖菓子コンフェッティと銀製の器ボンボニエーレ。】  
(元当館スタッフ)

## イタリアンレストラン紹介

～京都～

### トラットリア ルチアーノ

薪窯のある当店は、天然酵母生地で作るピッツアはもちろん、地物野菜や魚・肉も焼き上げる力強いイタリアンです。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)  
コーヒーをサービス (期間:6/2～6/30)

住所:京都市左京区吉田牛の宮町 8-5

電話:075-752-6131

facebook ページ:facebook.com/ciao.luciano



イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

## 『素晴らしき自転車レース⑱』

### ジロを走った女性レーサー

谷口 和久

#### ●1924年、混乱のジロ

今からちょうど90年前、1924年のジロ・ディ・イタリアは危機的状況にあった。有力選手たちがそろって出場をボイコットしたのだ。

事の経緯はこうだ。

自転車レースは、ジロもツールもそうだが、そもそも「スポーツ競技」というより「アドベンチャー」であり、サバイバル的性格をもって生まれたものだった。選手たちは、おのれの力だけでゴールすることが求められた。食料補給はもちろん、自転車の修理なども、すべて自分ひとりでしなければならなかった。ましてや、他人を風よけにするチーム・プレーなど論外だった。

しかしながら、レースは年々チーム・プレーの様相を呈してきた。ことに当時、ほとんどのチームは自転車メーカーがスポンサーだったこともあり、個人の名が出ることよりもブランド名が出るのが優先され、結果的にチームにひとり有力選手がいれば、その他のチームメイトたちはてんでばらばらに競争して結果的に全滅するよりも、有力選手を支えること — 風よけになったり、エースがパンクした時には自分のタイヤを差し出したり — を求められるようになってきた。

こうした流れにくさびを打とう、原点に立ち返ろうと、ジロの主催者である新聞社ガッゼッタ・デッロ・スポルトウ “La Gazzetta dello Sport” は、チームプレイ厳禁を打ち出したのだが、結果的に有力選手をかかえるチームの反発をまねいた。また、報酬をめぐる選手と主催者との間でいさかきもあり、初代カンピオニッシモのコスタンテ・ジラルデンゴや、イタリア人初のツール優勝者オッタヴィオ・ボッテッキアなど、錚々たる面々がレースを辞退することになった。

有力選手のいないレースは、一軍選手のいないプロ野球か、幕内のいない大相撲か、なんにせよ盛り上がり欠けるし、そもそも人数が集ま

らないことにはレースが成り立たない。ガッゼッタは窮余の策として、宿や食事を提供することを条件に、チーム登録をしていない個別登録選手 “Individuali” の出場を積極的に受け入れることにした。そしてその中に、なんと女性が一人まぎれこんでいたのである。



【アルフォンシーナ・ストラダ】

#### ●女性レーサー誕生

アルフォンシーナ・ストラダ Alfonsina Strada (出生名 Alfonsa Rosa Maria Morini) は1891年モデナ近郊の農村の生まれ。両親はふたりとも文盲の無学で貧しい小作農だった。10人兄弟の2番目に生まれたアルフォンシーナは、小さな弟や妹の面倒を見ながら両親を支える、おしんのような健気な女の子だったが、10歳のある日、父親が日銭の代わりにオンボロ自転車を譲り受けてきたことから生活が一変した。父親はくず鉄屋に売り払って多少なりとも生活の足しにしようと思っていたのだが、アルフォンシーナはそのボロ自転車にまたがって田舎道を駆けめぐりようになった。



あまりの熱心さに、近所の人たちから「イカれた娘“Matta”」と呼ばれるほどに。

そんなアルフォンシーナがレースに出るようになるのは、当然の成り行きだった。当時500メートル走の世界記録保持者だったカルロ・メッソーリのもとに通いトレーニングを積み、日曜はミサに行くと両親にウソをついて、男子にまじってレースに出場する日が続いた。とはいえ、ミサに行って足を泥だらけにしたり頭から砂ぼこりをかぶったりすることはないわけで、やがてそんなウソも両親にバレるところとなった。自転車を続けたければ結婚して家を出なさいといわれたアルフォンシーナは、自転車を通じて知り合った彫刻家のルイージ・ストラダと結婚。ルイージから結納品(?)として彼女に贈られたのは、当然のように新品のロードレーサーだった。



【男子選手とスタートに立つアルフォンシーナ】

### ●ジロ出場までの道のり

結婚した二人は、拠点をトリノに移した。先進的な北部の方が、自転車に打ち込むには恵まれた環境だったからだ。やはりエミリアの片田舎では、女性が自転車で走り回ることに對し、冷たい目が向けられていた。

同じような状況として、60年代を代表するイタリア人選手でフェリーチェ・ジモンディという選手がいるが、彼の母親もちょうど20年代に郵便配達のため自転車で村の中を回っていたのだが、仕事で自転車に乗っていたジモンディの母親に対しても、村人や教会の神父から「女性が自転車に乗ることは、まかりならん」ととがめられたというこ

とだ。ジモンディは、のちにこの頃を振り返って、そんな母親の背中を見て自転車乗りになることを胸に誓ったという。

話はさらにそれるが、今年の冬、『少女は自転車に乗って』というサウジアラビア映画が上映された。サウジアラビアはイスラム圏の中でもとくに戒律の厳しい国だそうで、そもそも国内に映画館がなく、当然映画製作なども(原則として)禁止されている国なのだが、国外に住むサウジアラビア人の女性監督が、そういったサウジの状況をひとりの少女の目を通して描いた作品である。映画が禁じられているくらいだから、もちろん女性が自転車に乗るようなことも禁じられているのだが、主人公の10歳の少女は意欲的で進歩的であるがゆえに、あちらこちらで戒律やタブーの壁にぶちあたる。映画の中では、そのようなイスラムの戒律やタブーが随所に描かれているのだが、カトリック国のイタリアも、かつては(程度こそ違え)様々な制約にしばられていたことだろう。

話をアルフォンシーナに戻すと、すでに何人かの先輩女性レーサーのいるトリノで力をつけていった彼女は、規模の小さいレースでは男性を打ち負かすこともしばしばとなり、ついに1917年にはロンバルディア州のコモ湖近辺で開催される、その名もジロ・ディ・ロンバルディア “Giro di Lombardia” というレースに出場するほどになった。このレースは、プロレースの中でも「クラシック」というカテゴリーに入るほどprestigeの高いもので、競馬の「G1」にあたる位置づけの大会である。このレースに完走したアルフォンシーナは、さらにもう1回ジロ・ディ・ロンバルディアに出場した。そして、いよいよ1924年のジロを迎えることになったのである。

### ●最初にして唯一のジロ出場女性選手

アルフォンシーナがどのような経緯でジロに出場できるようになったのか、今となっては定かではない。一説には、直接ジロの主催者であるガッツェッタの編集部に入り込んで直談判したということだが、勝気なアルフォンシーナのこと、ありえない話ではなさそうだ。ただ、ジロの出場リストには、はじめ“Alfonsin Strada”と記載されていた。名前の語尾の“-a”を抜いて、女性か男性かボカ

したわけだ。これが、アルフォンシーナ本人によるものか、主催者が意図的に隠そうとしたのか、あるいは単なる誤植か、今となっては不明だが、ロンバルディアのようなワンデー・レースと異なり、1カ月近くにわたる過酷なレースに女性が出場するというのはやはりスキャンダラスなことと考えられたのだろう。

当時すでに33歳に達していたアルフォンシーナは、89名の男子選手とともに、ミラノの中心部ポルタ・ティチネーゼを朝4時に出発した。その時の様子は、次のように描かれている。「肩からたすき掛けにバッグをかけ、中には予備チューブ、工具、パンク修理用の針と糸、ばんそうこうと傷口をぬぐうためのスポンジまで入っている。長めのソックスに黒のレーサーパンツをはき、ジャージの背中にはタイヤメーカーの名前が縫いこまれている。上にはジャケットをはおっているが、これは陽が出たら脱ぐのだろう。」

先頭からは遅れながらも、なんとか制限時間内にたどりついていたアルフォンシーナだが、ついにラクイラ L' Aquila に到着する第7ステージで制限時間をオーバーしてしまった。しかしながら主催者のはからいで、着順はつかないものの、最終ゴールのミラノまでいっしょに走ってもよいということとなった。実際、沿道には彼女を一目見ようという観衆が大勢かけつけていた。有力選手が欠けて話題性に乏しいジロとしても、かっこうの目玉となったことだろう。彼女も声援にこたえて、サイン入りのポストカードを配ったりしながら、無事ミラノまでの完走を果たしたのであった。

### ●その後のアルフォンシーナ

第2次大戦直後にご主人のルイージを亡くしたものの、その後、かつての自転車の師匠であったカルロ・メッソーリと再婚し、ふたりでミラノ市内に自転車とオートバイのお店を開くこととなったアルフォンシーナは、形こそ違え、自転車への情熱は、持ち続けていたようだ。

晩年にもモト・グッツィの 500CC バイクを乗り回すほど元気だったのだが、1959年の9月、そのモト・グッツィで起こした事故のため、帰らぬ人となった。享年68歳。

晩年に撮られたモト・グッツィにまたがった写真

も、現役時代に負けずおとらず楽しげで誇らしげで、微笑ましくなってくるものだ。



【晩年のアルフォンシーナ】

#### 【参考資料】

『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也, 未知谷, 2009)

Pier Bergonzi e altri, *Giro d'Italia La grande Storia N. 17*, La Gazzetta dello Sport, 2012

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009

[www.cyclingnews.com](http://www.cyclingnews.com) 関連情報

[wikipedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Alfonsina_Proni) 関連情報

(当館スタッフ)

#### イタリア語 無料体験レッスン

7月開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

#### ●四條烏丸:ウイングス京都

6/30(月) 19:00~20:30

#### ●京都本校:日本イタリア会館

7/2(水) 11:00~12:30 7/5(土) 11:00~12:30

#### ●梅田:大阪駅前第4ビル

7/1(火) 19:00~20:30 7/4(金) 11:00~12:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>